

## 文字の大切さ

徳島県 北島町立北島中学校 1年

橋本 未咲 (はしもと みさき)

私は六年生の時、識字学級に通っている人たちにお話を聞きに行きました。識字学級では、二人ずつのグループに分かれ、文字を学習していました。私は二人のおばあさんから、お話を聞くことになりました。二人とも、部落差別を受けたと言っていました。一人のおばあさんは、家が貧乏だったため小さいころから妹と弟の面倒を見ていました。両親は、工事現場で働いていて、仕事が休みになる雨の日にしか学校に行くことができませんでした。そのため、ひらがなやかたかな、漢字を覚えられなかったそうです。そのことで、学校では友達からいじめられて、学校には行きたくなくなったそうです。もう一人のおばあさんは、ふつうに学校に通っていました。しかし、ある日友達に「どこに住んでいるの？」と聞かれ答えると、急にいやな顔をされて誰も近づいてこなくなったそうです。そして次の日から、「きたない」「気持ち悪い」などひどい言葉を投げかけられたり、いすに押しピンを置かれるような嫌がらせをされて、とうとう学校に行けなくなってしまいました。私は、生まれた場所、住んでいる所で人を見下し、差別することに腹がたちました。文字の読み書きができないまま大人になったおばあさんたちは、生活の中でたくさんの苦勞をします。病院に行っても、自分の住所、名前が書けない。バス停の時刻表を見てもどこに行くか分からない。看板や道路標識が読めないなど、困ることが何度もあったそうです。そして、文字そのものが、おばあさんたちの子どものころに受けたいじめを思い出し、怖かったとも言っていました。あたりまえに学校へ通うことができた私にとって、文字の読み書きができないことが、こんなにも生活することを難しくしているとは想像していませんでした。そして、私がこれから挑戦しようとしている高校受験や、会社に就職する機会を持てなくなってしまうということにも気づきました。

おばあさんは、最初、識字学級に行くのは、はずかしいと思っていたそうです。理由は、おばあさんにもなって文字が書けないことを笑われたり、からかわれたりするのではないかという不安があったからです。しかし、自分の子どもや孫が文字を書けるのに、おばあさんとして情けなく悔しいという思いが、おばあさんを識字学級へ行こうという気持ちにさせていきました。通い始めてみると、みんな自分と同じつらい体験をしていたことが分かってきました。自分の思いを打ち明けることで、ここにいる仲間たちと一緒に頑張ろうと、前向きな気持ちになれたそうです。私は、識字学級を見学するまでは、悲しそうなおばあさんしか想像

していませんでした。しかし、識字学級で学んでいるおばあさんたちは、あんなにもつらい体験をしたにもかかわらず、仲間や先生たちと楽しそうに学びあい、ひとつの文字が書けるようになる度にこぼれてくる笑顔がとても印象的でした。

私は、文字を書けないことのつらさ、いじめられる側の苦しき、文字を知ったことがどれだけおばあさんたちの生きる支えになっているかを感じました。文字の読み書きは、おばあさんたちにとって、生きることそのものだったのです。

私が、つい最近公園に行くと、ペンを持った高校生くらいの人が、遊具に何かを書いているのを見ました。後で見に行くと「死ね」「うざい」「きえろ」と人の悪口が書かれていました。私は、一瞬のうちに人を傷つけてしまうこの文字を見て、とても悲しくなってきました。何の苦労もなく文字を学ぶことができたこの高校生は、文字の持つ重みを分かっていないのだと思います。

私たちの身のまわりにも、手紙やメールのやりとりの中でこの高校生と同じようなことはしていないでしょうか？今、中高生たちの間で携帯電話のメールやサイトコミュニケーションアプリを通じて、友人の悪口を流したり、掲示板に他人を中傷する内容を書き込むことなどが社会問題になっています。軽い気持ちや冗談のつもりで書いた文字が、相手を深くきずつけていませんか？文字を軽く扱っていませんか？

おばあさんたちは、「一つでも文字が書けるようになることが、うれしくてたまらない」と言っていました。何十年もの間、文字を学びたくても学べない。そのためにいろんな苦労やつらい体験をしてきたおばあさんたちから生きる喜びを教えてもらいました。だからこそ、私は、文字を大切に遣い、その文字でまわりの人を元気にしていくような人になりたいと、心から思うようになりました。